図書館だより

BUNKA GAKUEN LIBRARY

No.166

文化学園図書館

2018年4月5日発行

文化学園大学・文化ファッション大学院大学・文化服装学院・文化外国語専門学校
東京都渋谷区代々木3-22-1　TEL.03-3299-2395　FAX.03-3299-2604

文化学園図書館には ファッション雑誌がたくさんあります

今回はファッション雑誌を特集します。

皆さんは、普段どのようにファッション雑誌を読んでいますか？

最新の流行を知りたい、大好きなモデルさんの着こなしを真似したい、自分がデザインする服の参考にしたい。しかし、ファッション雑誌の役割はそれだけでしょうか？

文化学園図書館は、日本や海外のファッション雑誌の収集に力を入れています。創刊号から所蔵している雑誌もあります。それは、ファッション雑誌が、ファッションを学問として研究するための重要な資料だからです。

今回、本学の２名の教員にそれぞれ寄稿とインタビューをお願いしました。

「こんな読み方もあるんだ」「こんな価値があるんだ」と、ファッション雑誌の新しい面に気づいてもらえればうれしいです。

図書館を入ってすぐ左側にある服飾雑誌室には、ファッション雑誌のバックナンバーがたくさん置いてあります。ぜひ利用してみてください。

インタビュー【ファッション雑誌を使った授業】

田中 里尚　文化学園大学 准教授

ファッション雑誌から、どんなことを学ぶことができるのでしょうか？今回、取材してきました。

今回うかがったのは、文化学園大学准教授　田中里尚先生による講義「ファッション雑誌研究」。『KERA(ケラ!)』(1998年創刊。2017年で紙媒体は発行終了し、デジタル版に移行。)が教材として使われていました。

雑誌をスクリーンに投影して、表紙や記事を読みといていくことにより、数あるメディアの中での雑誌の位置づけや、読者とのつながりをつくる独自のやり方について理解していくことができます。

表紙の片隅であっても、注意して見ると、今まで見落としていたメッセージが示されている。この講義を受けた後では、これまでとは雑誌の読み方がかわってくるだろう、そんなことを感じる講義でした。

田中先生に聞いてみました。

――授業の内容について、ご説明していただけますか？

雑誌（主に日常的に消費されるファッション雑誌）を通して社会の姿を捉え、思考する方法を教えています。雑誌を、物質、表紙、コンテンツ、人、商品という切り口から分析していくことで、何が浮かび上がってくるのかを実演してみせるプロセスを重視しています。

――どういった雑誌（のタイトル）を学生に紹介していますか。

今回は90年代の雑誌を多く使いました。KERA、H、Zipper、CUTiE、MdN、 +81、STUDIO VOICE、zyappu、DUNE、CanCam、nicola、FUDGEなどを用いました。

――どのように学生に紹介するのですか？

即興的に誌面を読んで、仮説を立てる作業を見せる、ということを重視して、紹介しています。とりわけ、ターゲットが絞られている雑誌の方がメッセージは明確ですので、重宝しています。

――どうしてファッション誌の実物を使うのですか？ファッション誌を授業で使うことでどのような効果があると考えますか？

実物で、紙の質感や特定のページ外にある情報や情報の格納場所が雑誌の層のどの辺に存在するのか、を予測できる身体感覚を理解してもらうために、実物を使っています。厚みが感じられるものとそうでないものの、情報の密度の差異を感じられると思います。また判型によってヴィジュアル面にどのような違いが生じるのかという点も重視しています。

――実際の学生の反応はいかがですか？

私の言葉遣いに専門用語が出るので、最初は分かりづらそうにしていますが、どこを見るかを覚えてくると、だんだん自分でもできるようになります。現実を記号からどこまで読めるかということですので。

――最後に、図書館についてはどのように感じていますか？

日常的な雑誌の中でも販売部数が多い雑誌、ハイファッションの掲載が多い雑誌の収集が多いような気がします。それはそれでよいのですが、通俗的な雑誌や社会規範の枠を超えてしまいそうな雑誌についても、世界の多様性を理解してもらうためには収集していく必要があるのかなと思います。内容がキワドすぎて他大学では収蔵できない分野のものが集められていると、本学の強みになると思います。

田中 里尚
文化学園大学　服装学部ファッション社会学科　准教授
早稲田大学文学研究科修士課程を修了後、編集の仕事に携わりながら、立教大学文学研究科比較文明学専攻にて、博士(比較文明学)号を取得。2007年度に本学助教、2011年度より現職。
【研究テーマ】
日本近現代メディア史、社会史、服装思想論
【研究内容】
日本近現代における女性雑誌(主に『主婦の友』研究)の変遷とその中で表現された服装美の価値観(「おしゃれ」)の社会史的研究、ファッションとファッション･メディアとの関係性の実証的研究、戦後日本ファッションとポップカルチャーの関係性についての研究など。

図書館解題――読むことを読む

工藤 雅人　文化学園大学 助教

ありそうな情報がない

6年ほど前、70年代のコム デ ギャルソンについて書いてほしいという依頼をうけた。詳しいわけではなかったが「文化の図書館で『装苑』や『ハイファッション』を通覧すれば書けると思います」と気軽に返事をした。その後、服飾雑誌室で地道に雑誌をめくっていったが、作業が進まず、途方に暮れた。この2誌には70年代半ばまで、コム デ ギャルソンがあまり掲載されていなかったからだ（人気がなかったわけではない）。

当時は不思議に感じたが、原因は私が「情報の文脈」を理解していなかったことにあった。過去の雑誌を読めば歴史を再現できるかのように考えていたため、史料を読み解くことが「テキスト情報」を読むことを意味しないということを理解していなかったのだ。

同時代の大量の雑誌や書籍を同時に、読み比べられる環境

歴史記述に使われる史料には、手紙など具体的な誰かに向けて書かれたものが使われることがある。また、書籍や雑誌、新聞のように受け手が不特定多数の場合でも、年齢や考え方など読者層にあわせて内容は編集されている。このように、情報には必ず宛先や文脈がある。

当たり前だと感じるかもしれないが、自分が生まれる前の史料から、編集側の方針、読者の特性などを読みとることは簡単ではない。歴史研究の専門家でない限り、一見しただけでは手がかりさえも見つけられないであろう。文脈を理解することは思いのほか難しいのだ。

文脈をつかめないと、誉め言葉が嫌味として使われていた場合には、正反対の理解をしてしまうかもしれない。本や雑誌を読み解くことと「テキスト情報」を読みとることがイコールではないと述べたのは、このような意味においてである。

文脈の束としての図書館

冒頭の事例に戻ろう。文脈を知る手掛かりになったのは、服飾雑誌室に配架された『an・an』だった。試しにとめくっていると、71年8月5日号（当時は隔週刊）に7ページにわたって組まれたファッション写真が目にとまった。現在からでは想像できない色使いのコム デ ギャルソンだった。

調べていくうちに分かったのは、70年代初めの『装苑』や『ハイファッション』に掲載されていたのは、洋裁などの専門的な教育をうけたデザイナーによるブランドがほとんどだったということだ。一方、マンションメーカーと呼ばれたブランドを取り上げていたのが、創刊から2年ほど経過し編集スタイルを変え始めた『an・an』であり、コム デ ギャルソンもこのマンションメーカーに含まれていたのだ。これこそが、当初の私には見えなかった「情報の文脈」である。

当時を知る人からすれば、大した発見ではない。また、発見自体に価値があったというつもりもない。重要なのは、ほとんど手掛かりのない丸腰状態で史料調査にはいったにもかかわらず、たった一つの図書館という狭い空間のなかで「情報の文脈」の一部を発見できたという点である。

メディア史を専攻し、戦後のファッション雑誌の歴史についての論文を書いていた頃、学外者として使っていた文化の図書館で目にした忘れられない景色がある。座ろうとした椅子に落ちていた待ち針と、一人の学生が4人用のテーブルいっぱいに紙を広げ、厚めのちくま学芸文庫をペーパーウェイトにしてパターンをひく様子だ。

なぜ忘れられないかと云えば、研究対象であった50～60年代の『装苑』を読み込んでもいま一つ掴みきれなかった読者像を見つけられた気がしたからであり、「読者」という言葉で一括りにしてしまっては見えてこない、特定の雑誌読者の固有性を実感したからだ。

過去と現在とのつながりだけではない。過去のある時点において絡まりあった情報を確認することもできる。1955年に洋裁学校が背景にない服飾雑誌として『若い女性』が講談社から創刊されたが、そこにはドレメ式と文化式のパターン（製図）情報が掲載されていた。要するに、洋裁の対応OS（のようなもの）に違いがあり、『若い女性』はどちらにも対応していたのだ。図書館ではほかの婦人雑誌と比較することで、OSの覇権争いの様子をうかがい知ることもできる。

『若い女性』って何？と思った方も多いだろうが、当時は発行部数が20万部を超えており、知る人ぞ知る雑誌という類のものではなかった。売れていた雑誌でも時間とともに忘れられ、それとともに、情報の絡み合いも見えなくなっていく。

また、雑誌の切り抜きや書籍への書き込みや折り跡などは、その時々にこれらがどのように読まれていたかを知るための重要な手がかりとなる。雑誌や書籍、写真集が大量に収蔵された図書館という空間は、当然ながら、読むという行為とのつながりが深い。しかしながら、パターンをひいていた学生にとっては、服づくりをする空間でもあった。読むことはページをめくることではなく、服を作ることとシームレスにつながっている。

読むという行為それ自体が、ページをめくりそこに書かれている文字や画像の情報を読みとることではないとも気づかされた。

メディア史の研究者として文化の図書館を見ると、そこにはこのような情報の絡み合いや読むことに関わる痕跡が所蔵されている。

文化で学ぶ学生にとっては当たり前の環境の一つだろうが、リソースセンターや博物館などと同様に、文化の図書館が他の学校にはない貴重な歴史の蓄積であることを意識してみると、学びの幅が広がるだろう。雑誌に残された痕跡には、自分と同じ悩みを過去の学生も抱えていたことを感じられるだろうし、解決のための糸口となるだろう。

工藤 雅人
文化学園大学　服装学部ファッション社会学科　助教
早稲田大学教育学部社会科社会科学専修卒業、東京大学大学院学際情報学府博士課程満期退学。2016年度より現職。武蔵大学社会学部非常勤講師。
【研究テーマ】
社会学、メディア史、ファッション論
【研究内容】
「ファッション-雑誌」の歴史的成立に関するメディア史的研究、服を着るという行為に関する社会学的研究、日本の若手デザイナーの服づくりに関する批評的研究。

ファッション雑誌　今昔物語

「装苑」「HF:ハイファッション」「MR:ミスター・ハイファッション」

図書館にて創刊号から最新号までご覧いただけます。
♪新入生の皆様の多くは1999年生まれでしょうか♪
生まれた時のファッション雑誌を図書館で手に取ってみませんか？

「装苑」

日本で最も長い歴史を持つファッション雑誌

1936年4月号 創刊号

1999年10月号

「HF:ハイファッション」

装苑のハイクラス版として創刊

1960年8月号　創刊号

1999年6月号

「MR:ミスター・ハイファッション」

HFの男性版として創刊

1981年11月号 創刊号

1999年12月号

日本はもちろん世界中の
ファッション雑誌がそろってます！
♪皆様のご来館をお待ちしております♪

an・an/mer/NYLON（日・韓）/
Ray/S Cawaii!/sweet/ViVi
VOGUE（日・米・仏・英ほか）/Zipper
LEON/MEN'S NON・NO
Safari　等々

※「HF:ハイファッション」「MR:ミスター・ハイファッション」は休刊

不明な点は下記にお問い合わせいただくか、ホームページをご覧ください
TEL:03-3299-2395　　[URL]http://lib.bunka.ac.jp
twitterとfacebookにて図書館の情報を発信しています
[twitter] https://twitter.com/bunkalib　　[facebook] https://www.facebook.com/lib.bunka